

2019年12月6日開催

都市政策・地域経済コース ワークショップⅡ(後期第10回)

このはな「暮らし」の「持続」による、地域の変化について
一見っけ！この花／物件ツアー／アーティスト達の現実

講師 大川 輝 氏

(モトタバコヤ 主宰 株式会社 POS 建築観察設計研究所代表)

1.主旨

高齢化と空き家化が深刻だった大阪市此花区梅香・四貫島エリアにおいて、「地域」「若者暮らし」の可能性を考え、展示やイベント、ワークショップ、物販、物件紹介・まち歩きツアーなど企画している大川輝氏によるワークショップが開催された。

2.大阪市此花区梅香・四貫島エリアについて

元々臨海工業地帯として発展した地域でそこで働く労働者の住宅地として栄えてきたが、80年代以降は向上の衰退により人の流出が増え、空き家、高齢化が進んだ。

3.地域の変化のきっかけについて

2009年に開催されたアートイベント「水都大阪2009」の中心人物でもあった藤浩志氏〔現秋田公立美術大学副学長〕の誘いもあり、大川氏を含む10人の若手アーティストが、同地区内の長屋を改築した共同アトリエ〔コノハナメディア〕にて活動を始めた。その後毎年「暮らしのあそび、あそびの暮らし」をテーマにまちなみイベントを開催。大川氏自身は2013年に元タバコ屋を改築したカフェ「モトタバコヤ」と2階にPOS建築観察設計事務所を構え、都市計画コンサル、アートサポート、まち案内・物件ツアー、など地域とつなぐサポートなど活動の幅を広げ、同エリアに美術作家、ダンサー、写真家、料理人など若手のアーティストが拠点をもち始めた。

4.地域との関わり方について

地域における文化・教育・福祉の要素について、大川氏は此花区役所を通してまちづくりのワークショップに参加し、文化については、「このはなアートワークショップ」、教育については、「このはなカエルクラブ」、福祉については生涯学習系のイベントとして「エンジョイフェスタ」などの仕事を請け負った。また、梅香地区では、梅香地域活動協議会において総務会長を担い、広報関係や盆踊り大会、餅つき大会の少し実験的な「おもしろ企画運営」を行い、地域に移り住む住民との交流や世代間交流を促した。

5. 地域の変化の持続について

2009年以降同エリアへ移り住んだ人は2019年現在で75人、同エリアに関わる人、働く人は112人を数える。その理由として賃料の安さや利便性の良さも挙げられるが、大川氏によるシェアオフィス、まちの案内所、ネオカスタム賃貸、イベントスペースなど30カ所にも及ぶ拠点づくりとこのはな住人たちの「緩いコミュニティ」が大きな要因といえる。特に人が集まるサイクルのしかけとして「地域を知ってもらう」、「スペースが

できる」、イベントが生まれる」、「変なスペースが増える」がループし、持続可能な暮らしが形成されている。

6.地域変化の意義について

地域の変化を持続していくために大川氏は「空き物件を減らす」、「楽しい仲間を増やす」、「まちの魅力を伝える」、「まちの面白いを増やす」ことが必要と考え、「おもしろ物件がつくる可能性」の具現化として「まちの情報ステーション」、「物件を使つてのイベント」、「生活と活動の一体化」に取り組んでいる。また、アーティストが活動だけにとどまらず、住むことに意義を感じ、多様性のある生き方に対応し、安い物件、シェアハウス、アトリエ兼住居の物件提供を行っており、若者が増えることで高齢化を抑止することに寄与している。

7.地域との関係について

まちづくりには地域の理解とキーパーソンの存在が必要不可欠だが、同エリアはよくも悪くも無関心な住人が多く、排除されなかった点、また土地の大多数が地元不動産会社の借地であり、低価格で活用ができた点が挙げられる。一方まちのキーパーソンの存在がなかったため、アートイベントの運営や仲間同士のけんか、人が集まった後をどうするかなど課題は多く、大川氏が地域に入り込みトップダウンではなく、ボトムアップに重点をおいた。

8.現状と課題

梅香・四貫島エリアのまちづくりは地域が主体のため、だんじり会の若者やこどものPTA への協力もあり、行政主体ではないため、助成金に頼らず、自分たちのできる範囲で活動することで此花の暮らしを楽しみ、皆が此花に愛着を持っている。また10年間の取組みの中で既存団体の変化やアーティストの成長、変化、そして地域、住民の変化が起きている。一方、まちづくりの持続について担い手の問題が挙げられるが、大川氏は、担い手は属人的な要素に頼る部分が多く、梅香・四貫島エリアはひとまとまりではないところがいいところでもあり、これからはサポートにまわり、地域の主体性を見出していききたいと結んだ。

9.総括

本件における地域の変化について大川氏の人柄を含む、属人的な要素によるところが大きい。アートとまちづくりの観点からは、梅香・四貫島エリアのゆるい繋がり、つまり多様性を受け入れるまちであり、そしてそこに多様性を持ったアーティストが活動の場を求め、移り住むことができる環境にあったことではないだろうか。また、アートとまちのかかわりについて、行政主体ではなく、地域主体であることや住民が体験参加できるイベントが多いことにより、地域コミュニティを形成し、持続的なまちづくりに寄与しているものと言える。そしてそのゆるい繋がりの中で担い手が増えていくことを期待したい。

以上